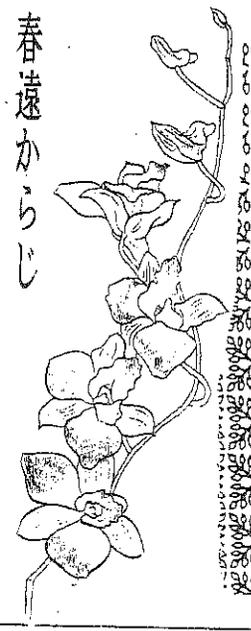


勝林寺報



春遠からじ

永井孝一郎

昨年の晩秋、それぞれの仕事を終えて、ひそやかに冬をむかえた植物たち。わが家の畑の一隅にかまえた廃材利用でできた棚に、何種類かのツタ植物が巻き上っている。

初夏のひざしに紫の房を垂らしていた藤は、いまはもう葉っぱのみ。たった一年でつけるはずがないと思っていたのに、それも大ぶりの実をいっぱいつけてくれた「アケビ」。これも今はもう葉っぱだけ。

この棚の主役、棚いっぱい茂っていたブドウ。昨年の春、すこし茶目づけに植えてみたヒヨウタン。これは20センチ弱のかわいい実を七・八個もぶら下げてくれた。これらそれぞれの物たちが、仕事を終え、葉をおとし、ツルだけになって、厳しい冬にむかって身構えているようにみえる。

きのうは立春。とはいえ但馬はまだまだ厳寒、雪のなかである。しかしさすがに夕方、やわらかな日ざしが棚に当たった。近づいてよくよく見れば、こころなしか芽のふくらみがあるようだ。棚の隣の梅ノ木のつぼみもすでにかすかに色づいている。

春待つところがかきたてられて、なにかすでに春に向かって芽をふくこの植物たちがうらやましく思えた。言葉はないけれど、みんなみんな春にむかって頑張っているその声が聞こえてくる。素直な声、自然そのものことば。たがいにその素直なちからいっぱいなことばをかけたあいながら、このものたちは春を迎えようとしている。

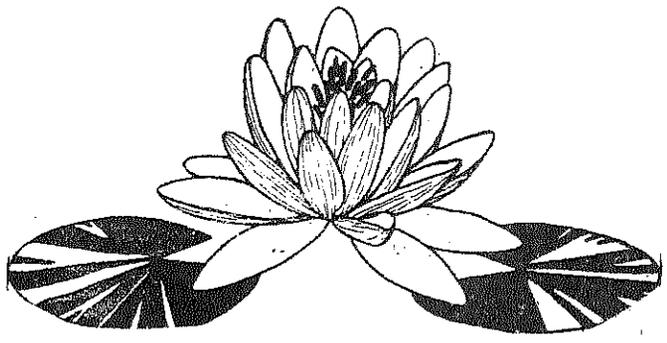
ところで、人間は、ただ一度の人生。もういちどという日はない。途中どこかで曲がってしまったら、もう取り返しはきかないのか。だれにでもそういう時がある。そういうときはどうすればいいのか。

人には「ことば」がある。「ことば」は人生の芽吹きだ。互いに、気持ちを、口に出したことばで話し合ってみたら、きっと別の道がひらかれるのではなからうか。

わたしたちのお寺「浄土真宗勝林寺」には、互いに聞いたり話したりする機会がたくさんあるように思う。

ひとりでも考え込まないでいいと思う。思っていることをすこしづつでも話し合ってみませんか。勝林寺寺報に投稿してみませんか。きっと、もう一度、春が来て、花が咲き、実のなる機会(とき)がくるはずですよ。

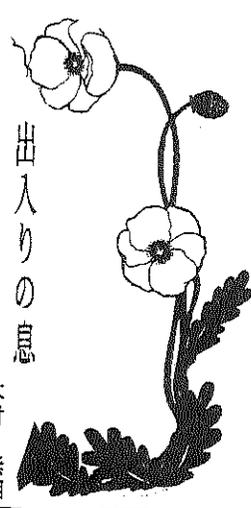
(勝林寺仏社会長)



全但小中学生 書道紙上展

葬儀

二月二十五日 口小谷 澤田 壽造 様 六十八歳



出入りの息

木村 無相

はいる息  
でる息またぬ  
いのちとよ  
出入りの息ぞ

ナムアミダブツ

ゆげ  
小三にし池きり

秀作 弘道小二年 西池 希里

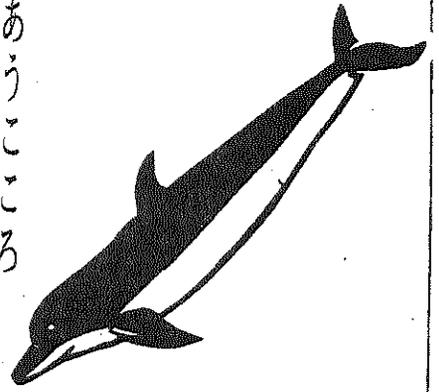
ゆつたりと、大きく書きました。よくれんしゆうしています。

三月のこよみ

- 一日 ダーナ研究会・検診
- 二日 結集大会準備委員会
- 四日 布教同志会
- 六日 総代引き継ぎ会
- 七日 光顕寺前坊守年回法事
- 十日 日高町
- 十二日 鉢山足立家報恩講
- 十三日 谷垣暎子氏宅法事
- 十四日 数森一男氏宅法事
- 十九日 中島明美氏宅法事
- 二十日 出石幼稚園卒園式
- 二十日 神戸別院彼岸会法座
- 二十日 神戸別院彼岸会法座
- 二十日 春彼出戸△△(2時)
- 二十一日 合同役員会(法要後)
- 二十一日 神戸別院彼岸会法座
- 二十一日 長専寺一周忌法事
- 二十二日 大月千鶴子氏宅法事
- 二十二日 あすなる(編集)
- 二十四日 出石町
- 二十六日 教区基幹運動推進委員会総会
- 二十六日 結集大会準備委員会
- 二十六日 みのりを聞く会
- 二十七日 検診・幼稚園さよなら会
- 二十七日 出石組内会
- 二十八日 平野秀夫氏宅法事
- 二十八日 中島庄二氏宅法事
- 二十九日 あすなる(録音)

本覚寺遠忌法要

4月 4日(午前九時) 出石町魚屋 「道如上人遠忌法要」



通いよのうこころ

鯨法会(くじらほうえ)

鯨法会は春のくれ 海に飛び魚採れるるころ。

濱のお寺で鳴る鐘が 揺れて水面をわたると

き 村の漁師が羽織りきて 濱のお寺へいそぐと

き 沖で鯨の子がひとり その鳴る鐘をききながら

死んだ父さま母さまを こいしこいしと泣いて

ます。海のおもてを鐘の音は 海のごとまでひびく

やら 青海島(おおみじま)の突端の岬には鯨の

墓があり、山の中腹には、死んだ鯨をとむら

う向岸寺というお寺もあります。

春のお彼岸過ぎに、村の漁師はいそいそと

寺で勤まる「鯨法会」にお参りするのです。

江戸時代にはこの仙崎湾は鯨捕鯨でにぎわ

いました。一シーズンに5・60頭もの鯨が

とれたと申します。その中には、親子ずれも

いましたし又おなかに赤ちゃんを持った鯨も

いたはずで。親をとられた親なし子鯨はどんなにか悲し

かったでしょう。「いくら暮らしのためとはいえ、むぎむぎ

ともの命を取ったり悲しませていいものだ

ろうか」ものいのちをいとおしむ仙崎のひとたちの

鯨法会

鯨法会は 春のくれ

海に飛び魚採れるころ

濱のお寺で 鳴る鐘が

揺れて水面を わたるとき。

村の漁師が 羽織りきて

濱のお寺へいそぐとき

沖で鯨の子がひとり

その鳴る鐘を聞きながら。

死んだ父さま母さまを

こいしこいしと泣いてます

海のおもてを 鐘の音は

海のごとまで ひびくやら。

人間は進化進歩してしまつて、魚のいのち

虫のいのち獣のいのちをむぎむぎと平気で踏

みにじつてしまつてしまつてしまつてしまつた。

もともと全てのいきものは同じ「母なる海

にはぐくまれて育つた兄弟だったのに。

いのちの故郷をひとり進化進歩と飛び出し

た人間は、「われひとり貴し」と、同じ人間

の間でさえ、競争や差別を生きるようになって

仕舞いました。悲しいことです。

ほとけさまは、虫も獣も魚も人間も、生き

とし生けるものすべてを「一切衆生」「諸有

衆生」と呼んでくださいます。その声の仏様が

「南無阿弥陀仏」のお念仏です。

一月の終わりに仙崎の地を訪ね、金子みす

通知簿

六十四歳になった女

「青い山脈」や「高校三年生」がわたした

ちの青春時代でありました。

昭和三十五・六年ころの高校生を教えて下

さつたO先生は、阪神方面の校長先生をなさ

つていて、七年前亡くなったと聞きました。

その先生の教えは、わたしの青春を育んで

いただいた大切な思い出として、いまでもあり

たく思っております。

その先生から教えて戴いた童謡。最近孫の

教科書にある例の金子みすずさんの「みん

なちがってみんない」というあのうたです。

先生は、その「みんない」というあんなに

といううたの言葉どりにわたしたちを扱っ

て下さつたとおもいます。

男子も女子も、出来る子も出来ない子も、

ハンサムな生徒も醜い子も、其のままに受け

入れ尊重して、一人一人を大切にしてくださ

いました。

生徒一人一人を、なにか尊敬して下さつて

いたようにも思います。

小生意気な時分でしたから先生にこんなこ

とをお尋ねしたことがあります。

「みんなちがつてみんないなら、何で通

通知簿の点を気にしなければならぬのでし

うが、わたしたちなにかひどく可哀な気がし

ます。

わたしたちの時代のんびりしていたのか

も知れませんが、そんなことを、というのは

生徒一人一人の成績を全部先生の責任に引き

受けて、大事に大事に「みんなちがつてみん

ないんだよ」と育んで戴いたO先生の御

恩をしみじみ噛み締めることです。

通知簿の成績におびえている孫を見て、そ

れから、仏婦の例会のときのご話、みほと

けさまのおこころは、「みんなちがつてみん

ないんだよ」「そのままこいよ」を思い出

していい時代、いい先生に育てられ、そし

て今、如來さまにはぐまれていたわたしの幸

せをしみじみ思つた事でした。

わたしの「人生の師」と仰いでいるお方からこ

んな宿題をもらつた。

「この宿題に取り組む事が、彼岸をめざす仏教

の教え」とおっしゃる。

一、老い行く身でありながら、老いない生き方。

二、病む身でありながら、病まない生き方。

三、死すべき身でありながら、死なない生き方。

四、減るべきものでありながら、減ばないとい

うこと。

五、尽きるべきものでありながら、尽きない。

わたし八十になった今、一と二がすこしづつわ

かるような気がする。

体は確かに老いぼれたが、老いない心を保つ事

は出来るときつた。ひとつやふたつ病をもつて

いても、その病を引、提げて健康にいける術も身

についてきた。

三から先が、これがいわゆる「後生の一大事」。

そうゆっくりもしておれない。「魚眉の急」と

言う気がしてきた。